

四國たより

愛媛縣技師 坂本 生

拜啓 筆硯益々御精健爲邦家奉欣賀候

陳者本縣下六少年の美舉として、大阪朝日新聞により全國的に報導せられたる、道路並に橋梁の修理に關し、御照會に接し候も當時出張致し居り御回答遷延奉謝候、本日歸廳直ちに寫眞撮影並に當時の模様別紙の通り(親泊郡長報)御報導申上候間左様御了承願上候 謹具

『けいんく橋』の修理と六少年の美舉

愛媛縣温泉郡長 親 泊 朝 輝

◎純眞の力と國民精神の美を顯現せる兒童

愛媛縣温泉郡味生村小學校

高等科二年生 一色 忠徳

高等科一年生 一色 常光

高等科一年生 王柳 勇

尋常科五年生 一色 武行

尋常科五年生 山内 巖

尋常科五年生 一色 清一

我が愛媛縣温泉郡味生村は、松山市の西、朝美村の大家が

臺を境として西方に展開して居る人口三千六百有餘、耕地田面積三百四十二町歩、耕地畑面積五十七町、南齋院、北齋院、別村、山西、大可賀の五部落より成る農村である。

而して松山市の水道は朝美村に入り西南下して味生村の中央を南北に岐て古三津村を經三津濱町に至つて海に注いで居る、此の河が味生村字北齋院を流下するに往時は津田川と稱する幅十二三尺餘の灌溉水路に過ぎざりしも、大正九年松山市に於て水道布設の際に幅員四間、護岸高六尺となりたるため河底中央に高八尺の橋脚を設け、西岸より花崗石を以て石柵となし面目を改めたるも、昨十二年七月の出水に際し橋臺缺壞の爲め北齋院字北津村有志の手によりて補騰したるも幾何もなく急斜して危険甚しく、通學兒童等は朝な夕なに此の險を繰り返さざるべからず、可憐なる下學年の生徒は上學年の生徒に倚りて辛うじて渡行する有様なるが、元來此の橋は南北兩齋院の要路なるも北齋院地内にあるを以て、南齋院の者は北齋院に於て修理すべきものと言ひ、北齋院村に於ては松山市が水道布設に依りて斯くなりしものなれば之が修理は松山市に於て施行すべきものと主張し各當局者が松山市に折衝中在再半歳を過したものである。

然るにこの橋梁の斜墜は通學生徒の最も恐れをなす處にし

て本年一月九日前記一色忠徳が登校の途上に於て幼學年生の難儀なるを見兼ね、同憂の前記五少年と申し合せ翌十日未明の寒風を衝いて道路並びに橋梁の修理に純真なる社會的奉公の精神美を發揮するに到つたのである。

橋梁の轉落後既に半歳、河水は遂に道路の土を洗ひて護岸を犯し路面上にも深さ四尺直徑五尺の大穴を生じ、爲めに荷物ある時は一旦之を下ろして區分の上運搬するの狀態なるを以て、六少年は第一に路面の整填に従事すること、し先づ橋梁下の土砂採收に取りかかりたるも、水面に薄氷ありて作業容易に抄取らず、爲めに翌日は始業時間前約三時間たらず遠く川上より之を運搬して修理の準備をなし連日之を繰り返して道路を改良し次いで橋梁の修理に着手したのである。

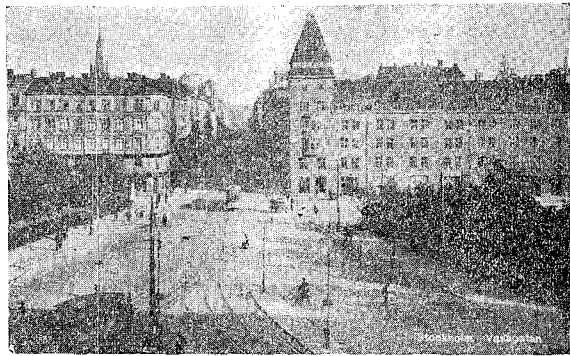
彼等可憐な六少年は、朝早く床を離れ、村は未だ深い眠に落ちて居る頃から互ひに誘ひ合ひ、そして寒空を尊き月の光りに倚りて作業を續けたのである。

たゞさへ寒き冬の朝、況してや暖かき母の懷に抱かれて夢未だ圓かなる頃なるに、健氣なる六人の兒童は勇を振つて幼な心にも萬人の爲め同窓の爲めにと進んで行つたのである、毎朝肌を刺す刀のやうな氷を割つて水に浸り『ジョレンヤスコーブを握つた手が痛たかつた』……『土俵に砂を詰めて引

き揚げるに皆で繩を掛けて引張つたが、モウ上がつたと思つたら又落ちたことなど度々あつて難儀した』……『仕事を早くする者には澤山容れねと言ふことにして、早やく走つて行く矢張り澤山容れてあつて重かつた』

右は少年等が當時の回想談の一節である、作業に容易ならぬ苦心の様が察せられる、而かも橋臺下に二個所の底無しと稱する處があつて、之を埋上げるには三四十俵の砂利を要せしとのことである、次には十六七俵の土俵積作業をなし、それより俵を筵とし之を二ツ折とし土砂を堅く詰め入れ、最後に砂を撒布して均してある、其周到なる作業振りにには感心せざる者はない、或一少年は修理中寒氣餘りに烈しく二三日作業を休まうとしたが、イヤまてく此の道と此の橋とのためには老人と小供ばかりの困難でない、大の男でも荷物を持ちて働らく人々は皆困まつて居る、一日でも半日も早やく直さねばならぬと、自ら勇氣を出して仕事を續けた』と言つて居り、また『竣工した時の心持は實に愉快で聲へよしの無い氣分に充ちて互いに手を取り合つて萬歳を叫んだ』と言つて居る。

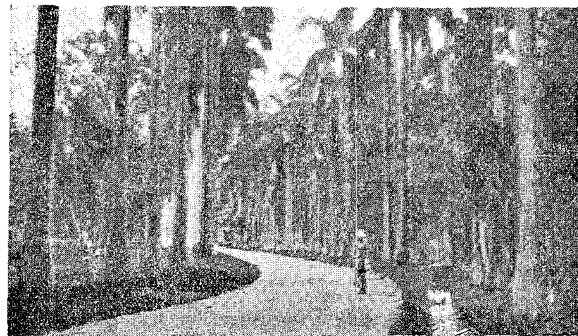
而して、此處を通る毎に何とも言へぬ嬉しさを覺へると共に何故モット早やく直ほさなかつたかと思ふ』と云ふのを聞



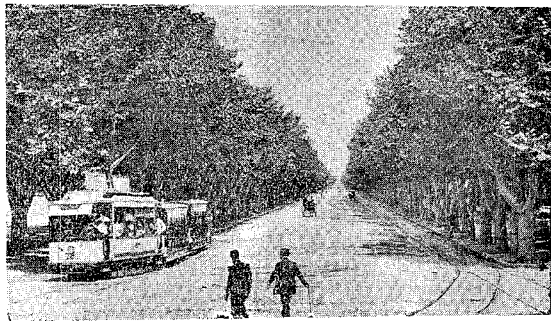
いて兩村の當事者及有志等は汗顔の至りで今更の如く此の純真なる子供心を敬虔の態度を以て觀、在郷軍人團や青年會員等は穴にも入りたいたと言つて六少年の行動を感謝して居る。

境に支配されて良心を消磨され、横着なそして勝手な性質を包含するに到るのである。今回の如き善行が誰人の心にも感動を永く保及し一般社會の風潮に浸潤したならば理想の樂土を出現することと思ふ。

るに聞き、二月十一日紀元節の當日に其の善行を表彰し、また村人は是より橋名を『まごころ橋』と改稱して永世に此の純眞の誠を紀念することにしたのである。



人は生れて何人を問わず純眞無垢の精神を保有せぬ者は無いが成人するに従ひ、漸次環



ルーボガンシ (中) ムルホクツトス (上)
(報誌歐 事幹本松) エーセルマ (下)